



ビハーラ山陰

第9号【令和5年3月31日】

発行元
事務局

浄土真宗本願寺派 山陰教区教務所

〒690-0002 島根県松江市大正町443-1 本願寺山陰教堂内
TEL 0852-21-4747 / FAX 0852-27-8351

次の時代のビハーラ活動



ビハーラ山陰
会長 武田正文

コロナ禍の影響は仏教界にも大きなものがありました。葬儀の形態が変化し、法座の中止が相次ぎ、「そもそも仏教とは、お寺とは」と問い直す時間となりました。ビハーラ活動についても同様で、病院への訪問が制限され今までのような活動ができなくなりました。改めて「ビハーラとは」というテーマを深めるタイミングが来ているのかもしれない。

ビハーラ活動の経験が乏しい私が会長という大切なお役目を頂戴するのは大変恐縮ではございますが、せっかくだいたいで縁です。今の時代においてビハーラ活動として何ができるのかを前向きに模索していきたいと考えております。

生老病死の苦しみに現場で向き合うのがビハーラ活動です。教区内でもさまざまな素晴らしい活動が行われているということを知っております。新型コロナウイルス感染症の影響で、法話会や傾聴活動などが行えなくなり寂しい気持ちを抱えている方も少なくないと思います。思ったように活動できない今だからこそ、横の連携を大切にしてビハーラ活動の可能性を探りましょう。

私たちは大きな時代の変化のタイミングを生きてことになりました。特に過疎高齢化の山陰地方では将来の不安がぬぐえません。仏教の長い歴史を振り返ると、こうした時代だからこそ仏教の役割が重要になっていたように思います。いかに生きて、いかに死んでいくのか、虚しい人生だったとならないためにも、阿弥陀如来のすくいのはたらきをお聴聞し皆でお念仏を喜びたいものです。

医療、福祉との連携を目指すビハーラ活動は、浄土真宗においてのちの現場にもっとも近い活動です。これまでのビハーラ山陰で積み上げられてきた伝統を大切にしながら、今の時代において大切なことは何かを皆様と共に模索していきたいと思っております。至らぬ点もあろうかと思っておりますが、どうぞよろしく申し上げます。





ビハーラ山陰 総会・研修会

と き 2022(令和4)年7月4日(月)

と ころ 本願寺山陰教堂 教化センター

講 師 徳永道隆先生(ビハーラ安芸副会長、福山大学・光華女子大学非常勤講師)

演 題 大悲に生かされて

開催直前、新型コロナウイルス感染症が急拡大し開催が危ぶまれましたが、3年ぶりに研修会を開催いたしました。臨床宗教家として、緩和ケア病棟で患者さんたちの傾聴に取り組まれている徳永先生より、現場での緩和ケアや傾聴等についてお話をいただきました。

出雲組 宗玄寺 上田 覚

会員同士久しぶりの再会で、フードバンクの心のかもった品々が並べられた会場は温かい雰囲気でした。

2022年度の事業計画の活動方針の一つに「ビハーラ会員相互の交流」が掲げられており、早くコロナが収束し、交流ができることを願っております。

研修では、「大悲に生かされて」と題して、安芸教区(広島)延命寺 徳永道隆住職が緩和ケア病棟での経験談をお話してくださいました。本人、家族のあらゆる痛み、苦痛を緩和する取り組みのお話を聞き、私に通じる場所があり、これまで自分自身が体験した取り組みについて投稿させていただきます。

私の妻は、13年前の72歳のときに白血病にかかり、島根大学医学部附属病院に4か月程度入院し、がん治療を受けました。病名を聞き、本人はもとより家族全員大きなショックを受け、大変な落ち込みでした。このことを一番先にお話ししたのが、宗玄寺の坊守さんでした。その時「しっかり寄り添って」と言われたのを思い出します。話したことによって、私の気持ちが落ち着き、なにか冷静になれたような気がしました。

病院が近いこともあり、高熱の時などは1日に数回通い、1日も欠かすことなく妻に寄り添いました。そして妻も厳しいがん治療に耐えてくれました。

おかげで現在は、いつも一緒にお寺にお参りし、ビハーラ研修へも参加でき、グラウンドゴルフ等も楽しんでます。妻も、入院中の寄り添いは大きな力になったと言ってくれました。私の心のケアをしていただいた坊守さんにも感謝しています。

もう一点は、同じ町内で家族ぐるみでお付き合いをしている二人暮らしのご夫婦のことです。いつもお茶会などで楽しんでいますが、数年前に、奥様が認知症を発病されました。それからはそのご夫婦の苦悩をみるたびに、少しでも心のケアになればと思い、地区の認知症研修と一緒に参加したり、私がお寺で聞いたお話をその夫婦にお伝えしたりしています。

私の今までの経験やこれからのことに、ビハーラ活動が大いに生かされていると感じており、今後も研修等に励みたいと思っております。

合 掌



ビハーラ山陰 総会・研修会 ご案内

と き 2023(令和5)年6月27日(火)

と ころ 本願寺山陰教堂

研修会は、歴代会長より、これまでのビハーラ山陰の活動についてお話いただく予定です。また、参加者の皆さまの思いを語り合う時間も予定しておりますので是非ご参加ください。

ビハーラ活動への思い・活動紹介

ビハーラ山陰役員の方より活動の紹介や今の思いを述べていただきました。



神門組 眞宗寺 堀西雅亮

皆さまこんにちは。堀西と申します。ビハーラ活動といえるかわかりませんが、いわゆる「多文化共生」(言葉や文化をはじめ、様々なちがいをもち私たちが、ともに安心して生きていける社会づくり)の分野で、仕事をさせていただいています。その仕事を通して、分け隔てをしていく私自身の姿を知らせていただきます。一人ひとり、それぞれの生き方にトビラが開かれ、ありのままの「私」が受け入れられている社会、地域、そしてお寺をめざしたいと思います。

浜田組 光西寺 廣崎勝美

ビハーラ山陰第7号新役員の紹介コーナーで掲載しましたが、私の所属する「ビハーラ浜田」の施設訪問は、新型コロナウイルス感染症の影響で中止が続いており、1日も早い再開を皆で待っている状況です。

今後は、ビハーラ活動の理念に基づいた、「ビハーラ活動の5つの方向性」により活動を広げていきたいと考えております。何と申しあげても、新型コロナの収束が一番です。

鳥取因幡組 浄宗寺 片上優子

ビハーラ活動として、残された時間に不安を感じている人に寄り添うとともに、日々の生活の中で、不安に縛られたり病になった人にしか分からない悲しみや苦しみに寄り添うことも大切ではないでしょうか。確かに他人の苦しみに共感するということはとても難しいことですが、自身がその立場に立った経験があるからこそ、その思いが一層強まっています。

人は生きていくのではなく、周りの支えがあってこそ生かされているのです。だからこそ「互いに寄り添っていく」ことも大切なビハーラ活動ではないかと思えます。

出雲南組 善徳寺 楠智加子

仏婦活動で先輩方から受け継ぎ、高齢者施設へ訪問しお部屋の清掃などをしておりましたが、コロナ禍において施設訪問ができなくなりました。何かできることはないかとウェストと新聞紙で作るゴミ袋を届けることで再開しました。お会いすることはできないけれど、作業することで私たちも安らかな気持ちになります。ビハーラ活動を通して学び、優しさや安らぎの輪を繋いでいくお手伝いをしていくことが私のできる第一歩だと思っております。



共に歩ませていただく

益田組 専光寺 柝畠宏樹

益田には「ほっとサロン益田」というがん患者や家族らでつくる会があり、2007年に発足し17年目を迎えました。現在はコロナの影響で益田日赤病院が使用できないため、公民館や市内の寺院(専光寺、妙義寺)を会場に月2回の集いが開かれており、私たち僧侶も微力ながら参加させていただいております。

この会は、患者さん同士の情報交換の場であることはもちろんですが、悩み事などを気軽に話せる貴重な場であると思えます。コロナで出かけることが難しいなか、本堂に入られ如来さまに手を合わせ、一言二言声を出す次第に笑顔が見えてきます。日頃から厳しくつらい治療に必死で頑張っておられる患者さんや家族の方々の頑張りに、ただ聞くことしかできない私ですが、心に寄り添っていただければと思う日々です。



大田西組 法久寺 特留宣裕

先日、末期癌と大脳皮質基底核変性症という難病を患っていた父を亡くしました。生前は、父の介護を在宅で母と二人で、主治医の先生、訪問看護師さん、ケアマネさんなど、多くの方々のサポートのもと奮闘しておりました。与えられた命が決まっている父と過ごす時間は辛く、厳しい現実ばかりでしたが、多くのことを学ぶことができ、生かされていることのありがたさを肌身に実感しております。この経験を、今後のビハーラ活動に活かしていけたらと思えます。

出雲組 宗玄寺 藤森観海

今年の誕生日で後期高齢者の仲間入りをします。多くの方々との出遇いや別れを通し、生かされて今があるとの想いを折に触れて感じるが多くなりました。私の「いのち」をどう頂き、「老、病、死」と向き合うかが問われています。ビハーラ活動の理念を今一度確認し、学びを深め、日常生活のなかでの実践に結びつけていきたいと思えます。

活動再開を願って

浜田組 眞行寺 渡邊哲彦

私のビハーラ活動は今年で32年目です。きっかけは、勤務していた病院の法話会です。23年前には、浜田組に部会の一つとして、ビハーラ浜田(会員89名)が発足し、全住職が順番に法話を担当していただきました。

今まで10の施設、病院で、職員や入所者との会話・歌・踊りなどで交流を重ね、会員間では、総会・公開講座・寺院訪問・昼食会などで交流し、心を通わせてきました。しかし今は活動休止中…4月から再開となる予定です。

ともに生きるビハーラ活動 江津組 西教寺 三谷卓良

3月2日に大田市で開催したビハーラ山陰公開講座。武田会長、堀西副会長、柝畠理事、フレッシュで実行力ある3人の姿に、ビハーラ山陰の新たな活動の期待が高まりました。

2016年度から3期6年、会長として会員の方々のご支援ご協力をいただき、「暮らしの中のビハーラ」活動を推進してまいりました。お世話になりました。

今、コロナ禍の活動として、家庭報恩講のお参りや訪問などで、傾聴し、受容し、響感していく、ゆっくりと向かい合う活動に取り組んでいます。

一人であっても一人にしない、真宗念仏者の社会実践活動として、人々の苦悩に寄り添いたいとの願いをもって、ふれあっていく、ともに生きるビハーラ活動を、皆さまとともにさせていただきたいと思えます。



ビハーラ山陰 公開講座

【とき】 2023(令和5)年3月2日(木)

【ところ】 島根県立男女共同参画センター あすてらす(大田市)

【講師】 【第1部】 辻 瑞恵 先生(株式会社はっぴいandプロジェクト 代表取締役)

講題: お寺と町の未来が変わる! 「お寺で終活 円満人生!」

【第2部】 鍋島直樹 先生(龍谷大学文学部教授)

講題: 「悲しみの中で生きることを支えたい

～ビハーラ活動と親鸞聖人の死生観～」



ビハーラ山陰 公開講座を受講して

出雲組 覚専寺 佐々木 智真

去る3月2日、ビハーラ山陰公開講座に参加させていただきました。私は現在、京都で龍谷大学の真宗学科に在籍し、学んでいます。ビハーラ山陰には2年前より入会し、今回春休み中でしたので参加させていただきました。

第一部では、株式会社はっぴいandプロジェクト代表取締役の辻瑞恵先生のお話を伺いました。辻先生は、今注目されている終活についての取り組みをしておられ、20数年前に最期まで自分らしく生きるために必要な「ゆいごん白書」を企画されました。また「ゆいごん白書」お寺版も発刊されています。これは、自分だけのエンディングの計画を立て、終活講座を受けるといった内容です。宗派問わず、多くのお寺で講座が開かれているそうです。

地域性もあり、なかなかどのお寺でも可能なことではないように感じました。しかし、人間誰も必ず人生のエンディングを迎える時が来ます。その時、安心して心穏やかにエンディングを迎え、お浄土へ還ることができれば、それは理想的なことだと思います。

お寺離れが深刻化する現代、お寺に求められること

を考えた時、ご門徒さんの人生のエンディングに寄り添うことは、お寺の大事な役割なのかもしれないと感じました。

第二部は、龍谷大学文学部教授の鍋島直樹先生のお話でした。私は、大学で鍋島先生の授業を受けており、親鸞聖人の死生観についても学ばせていただいています。授業とはまた違うお話も聞きことができ、新鮮な気持ちで学ぶことができました。「死は亡くなった人単独で成立するものではなく、その人の死を悲しみ弔う人がいて初めて死となり、死を通して悲しみ・愛があふれるのだ」というお話に感銘を受けました。

第三部では、辻先生・鍋島先生と参加者によるトークセッションが行われ、親鸞聖人と法然聖人の死生観(臨終行儀)は違うのではないかという質問に、鍋島先生は「確かに死生観に違いはあるが親鸞聖人、法然聖人、源信和尚の三人は、～大悲無倦常照我～ このことについては一致している」とおっしゃいました。この一句があるからこそ私たち凡夫は、くじけそうになっても踏ん張れるのだと実感しました。

最後に、鍋島先生の「お寺のみ教えの役割は、羅針盤の様である」という言葉にとても深く心を動かされました。私たちは人生の中で、時に迷い、方向を見失うことがありますが、その時、お寺が見失った方向を指し示す針となり道しるべになる場所、存在であってほしいと切に思いました。

合 掌



編集後記

先日開催した公開講座では「終活」について辻先生よりお話をいただきました。これからも、新たなビハーラ活動の展開について、皆さまと共に探りながら進んでいきたいと考えております。また、講座終了後に、鍋島先生より「ビハーラ活動は、人々の苦しみや悲しみを受けとめ、その人らしく生きられるように支援する活動であり、人を大切に思う気持ちそのものがビハーラ活動です。」とのお言葉をいただきました。

ビハーラ山陰では、共に活動していく仲間を募集しております。ビハーラ活動の輪と一緒に広がっていきましょう。詳細は **ビハーラ山陰事務局(電話:0852-21-4747)** までお問い合わせください。